

ペインクリニック用語集

初版刊行にあたって

日本ペインクリニック学会の誕生は、昭和44年（1969年）に発足した日本ペインクリニック研究会から発展的成長をした結果であった。爾来30年を経過し、前橋の大会は大幅な進歩を示し、33回目を迎えることとなった。その間、疼痛とその治療に対する研究、疼痛治療の重要性が認識され、診療、研究、教育に使用する言葉も飛躍的に増加した。

本書は、日本ペインクリニック学会が発足以来初めて出版する用語集である。言葉は人の意思と情報を伝えるメディアであり、正しい言葉によってのみ正しい情報が伝わり、記録として後世に残す遺産の源でもある。自然科学においては特に言葉の持つ客観性が求められ、共通の用語集としての必要性がここにある。『疼痛』と『ペインクリニック』における諸々の概念、現象、病像、研究記録などを、共通の言葉を用いて正しく表現することによって、初めて共通の場で正しく論じ合うことができる。

1996年、当時の花岡一雄会長の下に、用語集作成の検討が開始された。各委員が手始めに、学会誌、麻酔・痛み関係の雑誌・単行本などを中心に英語表記の単語を集め始めた後、本委員会において、欧米用語の翻訳、他関連学会での用語の使用の現状などを参考に検討を重ね、昨年（1998年）の広島での日本ペインクリニック学会総会において、その素

案を本学会のホームページを通して会員に公表し意見を求めることとなった。その後、持ち回りを合わせて頻繁に委員会を開催し、用語の抽出、選定、改変、補充などの検討を重ねて本用語集の刊行となったのである。

もとより用語集は完全なものではあり得ない。本用語集は初版としての性格上、一般化されている用語も加え、死語とはいえないまでも、わが国では現在使用されていないと思われる用語も一部補充し、また現在わが国だけで使用されている英語表記の用語で加えなかったものもある。言葉には生き物としての特性があり、その使用のされ方に流行があり、今後、この初版用語集を足掛かりとして、会員からご意見をいただき、追加・訂正し、時代に合わせた、よりよい、実際的な用語集に作成する必要がある。また、本委員会の活動開始時から論議されてきた他関連学会との用語の統一性なども今後の検討事項である。委員会としても、5年後を目処に改定が必要と考えている。

日本ペインクリニック学会の発展のためは勿論、疼痛治療の専門医 (pain clinicians) としての活躍の場を向上する上においても、適切な用語集を待つことの意義は大きい。全会員が満足できる用語集となるには時間を要するが、本用語集がわが国のペインクリニック学会の発展と疼痛治療専門医の日常診療にいささかなりとも寄与できれば幸いである。

平成 11 年 7 月 日本ペインクリニック学会

用語委員会 委員長 土肥修司

委 員 新井達潤

下地恒毅

花岡一雄

(50 音順)

(編集委員長) 十時忠秀

(事務局長) 宮崎東洋

(第 32 回会長) 弓削孟文

(第 33 回会長) 後藤文夫

第2版刊行にあたって

本書第1版は1999年7月に発行された。第1版の刊行の言葉にもあるように、言葉には生き物としての特性があり、その使用のされ方に流行がある。したがって、時代の動きと要望を反映した言葉の追加、訂正を定期的に行い、よりよい、実際的な用語集に作成してゆく必要がある。日本ペインクリニック学会用語委員会では、当初より第1版発行後5年を目処に第2版の作成を考慮していた。当初の計画に従って第2版の作業が開始され、ほぼスケジュール通りに完成した。委員会委員各位、事務局の皆様のご努力、ご協力に深く感謝する。今後、また、前回と同様に会員各位のご批判をいただき、これを次版に引き継ぎ、さらにより用語集を目指して行きたい。

第2版の作成にあたっては、第1版の誤字・脱字の訂正から取りかかり、ペインクリニックに関連のない用語およびほとんど使用されない特殊な用語の削除、新しい用語の追加、用語の訳の見直し、略字の追加・訂正等を行った。第1版では言葉の包括的理解を助けるため、関連用語を語群として一まとめに掲載していたが、今回、辞書としての観点からこれらは全てアルファベット順に置き直した。

今回の改定を通じて最も心を砕いたのは、どの言葉を採用しどの言葉を外すかである。無数にある関連する言葉の間に一線を画することは難しい。取捨選択に迷った時、臨床の場での重要性を第一の基準とした。

短期間内の、多忙な公務を縫っての改定作業であり、心残りが無いではないが、一つの区切りをつけたことを心から喜ぶたい。

最後に、新旧用語の一覧表の作成、用語の追加・削除等の改定作業に多大の協力をいただいた愛媛大学医学部麻酔・蘇生科 惣谷昌夫博士、中野郁子氏に深謝する。

平成 16 年 7 月 日本ペインクリニック学会

用語委員会 委員長 新井達潤

委員 表 圭一

佐伯 茂

花岡一雄

森脇克行

(50 音順)

機関紙編集委員長

後藤文夫

事務局長

北島敏光

第3版刊行にあたって

ペインクリニック用語集の初版が1999年に、改訂第2版が2004年に出版され、第3版の出版を主目的に新旧の委員からなる新たな用語委員会が2006年5月31日に開催された。この委員会で、第3版を2009年に出版をすること、そして、ペインクリニック医師の診療および研究に有用で、わが国の痛みに関する用語をリードする用語集にすることを目標とすることを決めた。約3年間に多くの課題を抱えながら予定通りに刊行ができたのは、関係各位の尽力によるものと深謝いたします。

第3版では、第2版を基本に用語の追加・削除を行った。用語の追加・削除には「痛みの用語集」(日本疼痛学会、日本ペインクリニック学会編、1999年)および「Bonica's Management of Pain 第3版」(Loeser JD編、2001年)、「Wall and Melzack's Textbook of Pain 第4版」(Wall PD, Melzack R編、1999年)、5版(McMahon SB, Koltzenburg M編、2006年)の索引を参考にした。追加・削除にあたっては、その基準を作成し、各委員の主観による差異を少なくするように努めた。また、使用頻度は低いが痛みの領域に特有な言葉、緩和に関する言葉および痛みの治療に使用される一般的な薬物名は採用することにした。その結果、第3版では8,105語(第2版は4,291語)の言葉を掲載することになった。

また、掲載予定の言葉の訳語を逐次検討した。訳語の検討には、医学および一般の英和辞典・辞書、他学会の用語集ま

たインターネットを用いた。第3版で訳語が変更された最も重要な言葉は「pain」である。「Pain」の訳語は第2版および痛みの用語集で「痛み、疼痛」とされているが、委員から「pain」の和訳を「疼痛」とするのは不適切ではないかとの意見があった。委員会で「pain」が医学界および一般社会でどのように訳されているかを検討した結果、医学界では「pain」は「痛み」あるいは「疼痛」と訳され、この2つの言葉はほぼ同義に用いられている。他方、一般社会では「pain」は「痛み」とのみ訳され、「疼痛」は疼^{うず}き、ずきずきする痛みを表しており、痛みの性状の一つと解されていることが明らかになった。この検討結果を踏まえ、委員会では、医学界での訳語に一般社会とは異なる意味を持つ言葉を当てることは好ましくないと考え、「pain」の和訳は「痛み」、「痛」として「疼痛」は除くことが適切と判断した。しかしながら、医学界では「疼痛」は定着した言葉であり、直ちに「pain」の訳語をすべて「痛み」に変更するのは現実的ではなく、第3版では「痛み」、「痛」と「疼痛」を併記することにした。ただし、固有名詞になっている言葉では、今回の改訂では従来の訳語を優先した（例：International Association for Study of Pain 国際疼痛学会、国際痛み学会）。また、「neuropathic pain」は、ペインクリニック用語集第2版で「神経障害（因）性疼痛」、「ニューロパシックペイン」、他の用語集では「ニューロパチックペイン」、「ニューロパシー性疼痛」と和訳され、臨床でいろいろな言葉が使用されているのが現状であり、委員会ではその訳語を統一化することが必要であると、検討した。その結果、「neuropathy」の和訳は「神経障害」であり、用語委員会では「neuropathic pain」は「神経障害

痛」, 「神経障害性の痛み」が適切と判断し, 「神経因性疼痛」は除かれた. この「pain」と「neuropathic pain」の和訳の検討過程については「日本ペインクリニック学会誌」(2009年, 第4巻)に掲載した. さらに, 痛みを表現する言葉でマギル痛み質問表(McGill Pain Questionnaire: MPQ)に記載されている言葉は, 熊澤らの訳(付録: 痛みの表現語)を第一に採用した. また, 今回十分に検討できなかった言葉も数多くあり, 次回の改訂を期待したい.

用語集を充実させるために, IASPの「Classification of chronic pain」(1994年)に掲載されているpain termの和訳, MPQの和訳, および人体の皮膚節を掲載した.

今回の改訂に当たっては, 一堂に会しての委員会での検討の外に, 委員のメーリングリストを作成し, E-メール上で議論, 意見交換を行い, pain, neuropathic painなどの主な和訳の改訂に関して第42回日本ペインクリニック学会学術集会で報告し, 公開討論を行った. また, すべての第3版(案)の語句はホームページ上に掲載し, 会員の意見を聞いて最終的にこの改訂版とした.

最後に, 第3版の刊行にあたって, 愛媛大学大学院医学系研究科生体機能管理学の満田香織氏, 藤岡めぐみ氏, 真興交易(株)医書出版部社長 橋内千一氏, 同編集部 渡邊雅子氏, 大塚正幸氏のご援助, ご協力に深謝する.

委員 有田英子
表 圭一
鈴木孝浩
寺井岳三
中谷俊彦
西江宏行
藤井善隆
森脇克行
(50音順)
比嘉和夫
村川和重
花岡一雄

学会誌編集長
事務局長
代表理事

第4版刊行にあたって

ペインクリニック用語集第3版が出版されて、5年が経過した。この間に、様々な用語が、創作、改変、淘汰されてきた。その時代の科学の水準を万人が共有するためには、その用語を統一し、意味あるものに成長させてゆくことが不可欠である。第3版では、大胆な編集方針の下に、用語の取捨選択と用語の統一が行われた。そして、その編集方針の結果、第3版は充実した内容の用語集となった。第4版では、第3版を基にして、時代に相応した用語集を目指す編集方針を掲げ、一般的な医学用語は大胆に削除し、ペインクリニック診療や疼痛学に直結する用語を採択した。同時に、略語も整理し、対訳本文中に略語は掲載せず、略語を含めた一連の用語は、略語を除いた形で掲載した。可能な限り、簡潔で内容の濃い用語集を目指した。

日本医学会は、日本の医学用語の統一を目指して「医学管理用語」を作成している。ペインクリニック用語集第4版も、日本医学会の編集方針に沿って編集を実施したが、日本医学会が提示する用語では明確に事象を表現できていない箇所も存在した。このため、本用語集では、ペインクリニック診療に最も適合した用語から順に記載するようにした。さらに、用語の意味や訳の統一を目指して、従来から引用されている教科書の索引以外に、国際疼痛学会 (IASP) の用語集も参考として編集に当たった。語句の正当性や妥当性は、Weblioなどのソーシャルネットワーク上の辞書も紐解いて検証した。そのため、作業は膨大となり、用語委員会の委員の皆様

には多大なご苦勞をおかけすることになった。しかし、委員の皆様のご努力が実を結んで、第4版は当初に想定していた内容を超える充実した用語集となった。さらに、評議員や会員の皆様からのパブリックコメントも用語集に反映させることによって、より洗練された内容となった。

今回の編集作業に当たっても、継続審議されている、「pain」の邦訳を統一するか否かが議論された。しかし、「pain」を主要用語とする学会間の意見統一がなされていないために、今回の改訂においても従来通り、「痛」、「痛み」、「疼痛」を併記することとした。早急な意見調整が必要な時期にきていることを、編集作業を通して痛感している。さらに、今回の改訂では、日本ペインクリニック学会ホームページ上に、「用語解説集」を掲載した。用語委員会委員が採択した120を超える用語を、評議員の皆様に解説していただいた。素晴らしい解説内容に、用語委員会委員一同は、評議員の皆様のご協力とご尽力に深く感謝申し上げます。今後の検討課題としては、上記の「pain」の用語統一と用語集の印刷物としての発行の廃止の是非が挙げられる。Web環境の整備とともに、冊子としての体裁で用語集を発刊し続けることに疑問が投げかけられている。これらの問題が、次回の改訂時に解決されることを願ってやまない。

最後に、第4版の刊行にあたって、原稿の整理にご協力いただいた学会事務局 石毛美智子氏、また、真興交易(株)医学出版部社長 橋内千一氏、同編集部 渡邊雅子氏の多大なご協力とご援助に深謝する。

平成 27 年 5 月 日本ペインクリニック学会

用語委員会 委員長 稲垣喜三

副委員長 川股知之

委 員 荻原正洋

小幡英章

鈴木孝浩

田上 正

中谷俊彦

長 櫓 巧

西江宏行

森脇克行

(50 音順)

学会誌編集長

山本達郎

事務局長

奥田泰久

代表理事

細川豊史